

# 教えの庭から

昔は、高齢者に対する現役世代からの厳しい扱いがありました。「檀山節考」(深沢七郎著)は、姥捨てを正面から取り上げています。以前、DVDで見ましたが、このたびは小説を読んでみました。

物語では、山奥の小さな村では、常に食料が足りず、限られた数の人しか生きられない。そこで、70歳になった老人は、「檀山参り」と称して、山奥の「檀山」という山に遺棄されることになっていました。誰もが山に捨てられるのを嫌がる中で、主人公のおりん婆さんだけは、「70になったら檀山に行く」と決めていました。息子の辰平は、その指示の通りおりんを背負子に乗せて檀山の頂に向かい、頂の岩陰におりんを降ろして、山を下らねばなり

## 高齢者の役割とは

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

ませんでした。立ち去りから捨てられることを望んだねている辰平に、おりんは「帰れ!」と言います。辰平が帰る途中から、雪が降り始めます。そのことをおりんに知らせたくて、頂へ



挿絵 平尾恵郷

と戻ります。頂の岩陰には、体をむしろで覆い、合掌しながら念仏を唱えるおりんは、寒い冬の山頂で雪に閉ざされて死を迎えたのでした。

ここで、なぜおりんは自

生を受けるは難く、やがて死すべき身の今命あるは「難し」とありますように、人間として生まれてくることは、奇跡的なことなです。事実として、私たちの先祖さまの数を考える、より鮮明になります。まず私たちに両親がいて、4人の祖父・祖母がいます。次に3世代遡ると8人の曾祖父父母がいます。10代遡ると1024人の祖先がいます。20世代遡ると100万人以上の祖先がいます。これらの方々の一人でも欠けたら現在の自分はいません。祖先の命のバトンタッチがあったからこそ、私たちは存在しています。

さらに宇宙的に考えると、私たちの「命」は、138億年前に宇宙ができたときから準備されている無数の縁によってつながってきた「命」なのです。この大きな命の流れの中に自分の命があります。だから、「自分の命は、自分のもの

だ」という思いは、誤りです。自分の命は、人と人との関係性の中にある、自身のものであるとともに縁ある全ての人々のものによって、人や物とつながっています。このように、連続と続きます。次に3世代遡ると8人の曾祖父父母がいます。10代遡ると1024人の祖先がいます。20世代遡ると100万人以上の祖先がいます。これらの方々の一人でも欠けたら現在の自分はいません。祖先の命のバトンタッチがあったからこそ、私たちは存在しています。

私たちの命を考えてみると、発句経に「人として